

1. 基調を補強する視点で

今年の京生研基調提案も、私の心に突き刺さった。K＝最も重い課題を持つ子ども、そしてその子の生きる世界に焦点をあて、実践と分析を端的に示している。京生研がこれまで歩んできた道を、文字通り、守り発展させている基調提案だと受けとめた。

この基調提案で紹介されているような実践は、現在の学校現場ではそうたやすく出来るわけではない。「ゼロ・トレランス」とまではいかなくとも、課題の重い子は「集団生活を乱し、学校のルールを破壊し、弱い子ども達を攻撃する」がゆえに、しばしば迷惑な存在として扱われる。良心的な教師は、課題の重い子の生活背景を理解しなんとかその子を守ってやろうとするが、数の力や一部の発言力の強い教師によって、結果的に排除されることになりがちである。

私がこの間に会った子どもたち数人も、気をぬくと排除されかねない状況があった。

2. ネグレクトのA男

中学入学後は委員に立候補するなど意欲的な姿勢をみせたA男だが、委員会での作業中に、同じ小学校出身の生徒により、家の中の様子（まったく掃除されておらず、足の踏み場は30cm四方しかない、いわゆるゴミ屋敷状態）を周囲の生徒らにばらされたことがきっかけとなり、次第に教室に入れなくなった。担任は、個人面談の際に家庭状況が深刻であることを改めて知る（食事はまともに食べていない、母子家庭だが時々母は帰ってこない、洗濯は自分で手洗い、風呂は使えず体をふくだけ→常に汚れており身体から異臭）。担任と学年主任はすぐに管理職に事態の重さを告げるが、管理職は児童相談所への通告を避けたがり、他の方法を模索せざるを得なくなる。母親と会うも絶対にネグレクト状態であることを知られまいとかたくな態度を崩さない。叔母にも連絡をとり、何とか彼の生活状態を改善しようと試みるも、母と叔母の姉妹関係が悪化してしまう。

中1後半より、教室に入れられない状況が進み、学年教員が別室や保健室で対応する時間が増えていった（これは学年で合意して進めていた）。12月になり、ようやく児童相談所との連携が進み出した。そんな折、友人の家に「家で虐待を受けている。児相の寮へ入れられる」と事実を誇張して泊めてもらおうとした。友人の母がこれを不信に思い、「泊められないので迎えに来て欲しい」と学校へ依頼。学校が連れ戻したことから、A男は教員

への不信感をいっきに強めた。その後、母親の希望もあり、A男自身も生活を変えたいと希望して児相の寮へ入ろうとしたが、服装を着替えることにこだわり、「集団生活ができない」との理由で、入寮できなかつた。しかし、その後も本人が突然に児相を訪れる等をしたことから、結果的に学校と児相は連携が強くなり、ケース会議を開けるようになった。

中2になり、授業のない数日間は教室に入れたが、授業が始まるととたんに入れなくなる。A男は学習の遅れが気になっているはずだが、一切その本音は語らない。独特のこだわりがあった。学校から足が遠のくが、欠席状態が長く続くことはなく、昼頃に登校し2時間ほどを別室で過ごし、放課後になるとつるんでいる3年生と帰宅するという生活パターンとなっていた。登校するまでと下校後は、地域の児童館で過ごすことが多くなり、館長のアドバイスには聞く耳を持つこともあった。2年になってからはケース会議に、校長・教頭・学年主任・担任・養護教諭、児相ケースワーカー・児童館館長・子ども支援センター支援活動員が参加し、2～3ヶ月に一度ではあるが情報を共有し合いA男の支援策を模索し続けた。(A男の他にも、さらに家庭状況の複雑なB男も対象にあげ、同時に支援策を模索していた。障害児支援学級に所属するB男は完全不登校に近く、学校は会話も困難な母親との関係を改善する努力し続けているが、ここではB男の事例はとりあげない)

体育祭にA男とB男は私服でやってきた。「見学だけさせてほしい」という。「そんな服装ではダメ」というのは簡単だったが、少しでも受け入れることが大切だと判断して、保護者席あたりで見学することを認め、そばで付き添った。

中学校合同音楽会も「何とか連れて行こう」と合意できた。京都市交響楽団による本格的な演奏視聴は、音楽好きのA男には絶好の機会だと考えた。しかし、集団の中には入れない。私が、学年集団と少し離れたところでA男と二人で行動することを学年に受け入れてもらい、半日を過ごせた。A男は、演奏中、手元で小さく指揮をしながら夢中で聴いていた。

3. あの子らに割く時間はない！

別室での支援体制は、学年の教員のみならず、支援員や学校ボランティアの学生らの力も積極的に借りた。

1月に、別室指導をめぐる、学年会で激しいやりとりがあった。実は、A男以外にももう1人、別室体制で支援していたC子がいた。C子は中2の夏休み中に大きく崩れ、秋以後、指導が困難になった子である。おそらくこの時期に同じクラスで距離の近かった女子生徒たちとの関係がうまくいかなくなり、それが教室拒否につながっていったと思われ

る。実際、激しく逸脱するC子の言動に、周辺の女子はついていけなくなるという心境は理解できた。

C子の問題行動の背景には父親の暴力的養育態度があった。母子家庭に育ったC子の父親は、父親がどのように子どもに関われば良いかわからないとしきりにこぼされていた。何かあると子どもを殴る……それが親としてのつとめだと勘違いしていた。そのため、男性教師が小柄なC子に大きな声をあげたり、反抗的な態度に業を煮やして腕でもつかもうものなら、激しく暴れた。結果、3度の「対男性教師暴力事件」をおこした。男性教師の中にはかなりのケガをするという事態もあった。C子の対教師暴力事件についてはさすがに3度にわたって、被害届を出すか否かで意見は分かれたが、最終的に「警察に相談（被害届なし）→警察にC子をよんでもらい指導をいれてもらう」という形で決着した。

A男とC子以外にも、学年には手のかかる生徒が数名いた。D子は小学校時代から薬物を吸引する上級生に囲まれて生活していた。時々、授業を受け続けることが出来なくなりふらっと保健室やトイレに逃げようとした。そういう場面に会ったら、私はC子と別室などで、上級生との関係や彼女の心の揺れにじっくりとつきあっていた。

また、発達障害の男子生徒のE男・F男は1年時しばしばパニックとなったり切れたりして暴れた。アスペルガーのE男は些細なことでパニックを起こすことが多かった。ADHDのF男は他の生徒との関係が発端となりよく切れて暴れた。この男子生徒二人が目を離せず、1年時はほとんど廊下に張りついて、何かことがあるとすぐ指導に入った。二人は、2年生になってからは周囲の成長や担任たちの支援もあり、ほぼ問題を起こすことはなくなってはいた。

決して楽ではない学年状態で、A男とC子の二人が登校してきた際には、別室を二つ設けて教師が対応するのは、正直、荷が重い（時にボランティアなどの支援もあるが）。

空き時間は確実に減るし、もともと総合学習にしろ行事にしろ研究発表にしろ、活動が盛んなこの中学においては、果てしない労働過密が進んでいた。そんな状況の中で、放課後の臨時学年会中に、生徒指導の先生が「別室体制は必要ない。あの子たちに手をとられて、仕事もできない。登校してもまじめに別室で勉強するわけではない。意味がない。そんな時間があるなら、自分の子に関わりたい」とおっしゃった。別室で生活しているA男とC子の状態が改善を見通せない時期だったので、反論しがたい雰囲気もあった。それでも、「今の体制が必要だ」と主張される先生もいて、しばらく論争が続いた。

「他の先生はどう思われるのですか？」と聞かれた。生徒指導の先生は、当時子どもさんが入院してしばしば早退されていた。我が子に関わりたいという先生の思いも聞いてあ

げなければと黙っていてしばらく黙っていたが、今がタイミングだとみて切り出した。

私「今、A男とC子に関わってあげなければ、取り返しのつかないことになりかねないと思う。A男はこのままだとホームレスになっていくだろう。強く指導すると暴れることもあるから、何をやり出すかわからない。大きな事件を起こしかねない子だと思う。

C子も心配だ。お父さんは、何度も私たちと話し合う中でようやく子どもに手をあげなくなった（一度、親子の激突でパトカーがマンション前まで来たらしい）。しかし、援助交際から薬物へ進む転落の道は容易に予想できる。今、あの子らに私たち教師が関わらないで、教育は成立しない。時間をかけて関わっても良くなるかどうかはわからない。それでも、大人があの子らのことを心配して関わり続けたことは残っていく。

今、A男もC子も、甘えと反抗を繰り返しています。ここを乗り越えるとあの子たちは大人を信頼し始め、『安定した信頼関係』になっていきます。今が大事な時です。時間は取られますけど、可能な限り、関わってやりましょう！」

流れは決まった。別室存続。可能な限り、粘り強く関わろうと合意できた。生徒指導の先生も渋々だったと思うが受け入れてくれた（この先生は決して生徒が嫌いではなく、不登校の生徒にすぐ対応し続けてくれて、見事に改善できていた）。

4. 変わり始めた生徒たち

A男は、養護教諭や年齢の近い支援員やボランティアの女性たちには、自分の気持ちを吐露することが多かったので、A男の気持ちは支援員らの報告も含めて読み取る努力を続けた。ツッパリが特攻服を着て登校したがったように、A男はある楽器をもって登校することが多かった。一種の「武装」だろう。別室では彼の演奏に心ある教員たちはじっくりとつきあった。中2の後半で支援に入ってくれた学生は書道が得意であったことから、別室で1回3時間ほどの書道教室を3回持ってくれた。A男は初めて「作品」と呼べそうな書を完成することができ、彼の自己肯定感を少し満たすことができた。

それまで、担任や学年教員が、「もし学校で勉強しにくいなら、籍を残して週に数日間だけ学びに通える場所があるよ」と具体的に適応指導教室などを紹介しても興味を示さなかったA男だが、仲の良かった3年生が高校に合格したことから、急に進学に関心を持ち出した。「自分でも進学できるかもしれない」と思いだしたのだ。しかし、学校では、勉強が遅れている自分をさらけ出したくない。A男の意欲をうまくいかせるように、腰の重かった母親へ何度何度も連絡をとって、ようやく3月になって適応指導教室（近隣の学校に設置）へ見学にも行くことができ、春以後の通学が決まった。

C子も、別室では学習しているのか遊んでいるのかわからないような場面も多かったが、少しずつ安定してきた。3度目の暴力事件の原因が携帯電話の持ち込みであったことから、本人は「もう絶対に持ってこない」と約束。もし、持ってきても、必ず担任に預けてから入室するという態度が出来てきた。そんな時、一度、うっかりして鞆に入れたままということがあった。鞆から着信音が鳴り出した時、素直に携帯を出したC子。それでも約束では「今度持ち込んだら、携帯は解約する」と親子共々合意していた。この日、対応した担任と学年教師は、「超法規的措置」で「もう持ってこないこと」と指導して、親には連絡しないで終わった。結果的には、C子にとって「今回は先生らが自分のことを考えて見逃してくれた。もう気をつけよう」と態度を改めることにつながった。C子とは少しずつ穏やかな関係が作れるようになっていった。

5. 終わりに

3年に進級し、それぞれが修学旅行と進路に向けて頑張り始めた。A男もC子も、その他の不登校生も、教室に入り始め普通に生活をスタートすることが出来た。もちろん、それぞれの課題が簡単に解決するわけではない。しかし、母親が精神的な問題から「絶対に学校に行かせない」とかたくななB男以外は、全員が修学旅行にも参加できた。2年学年末時に修学旅行委員会を発足させ、自主と自治を軸にすえた取り組みが展開できた修学旅行は大成功に終わった。

1月の学年会で、「排除しない。粘り強く関わり続ける。関係機関や関係者とできる限り連携して、生徒を育てる」この方針を学年としてはっきり方針を打ち出せたことが実践のターニングポイントだったと思われる。

私たちの仲間、この不登校問題について、その原因を洗い直し、『なぜ不登校になっているのか』を明らかにし、この不登校に追いやられた子どもたちが登校できるような実践をしていく過程に、独裁的な状況が進む体制を変えていく新たな道が開かれるのではないかと模索を始めている。

基調のこの部分にかかわって、学年主任として進めた拙い実践を報告させて頂いた。